

## 保育者養成における音楽的専門性の育成

—幼稚園教師へのピアノ等鍵盤楽器に関する質問紙調査を手がかりに—

坂田 直子\*・山根 直人\*\*・伊藤 誠\*\*\*

キーワード：幼稚園教員、ピアノ、幼稚園教員の専門性、教員養成

### I はじめに

保育者養成においては、ピアノを弾けることが保育のために必要な音楽の能力の1つとされている。しかし、学生の入学以前のピアノ等鍵盤楽器の学習経験についてはさまざまであり、ほとんど経験のない初心者も含まれているのが現状である。限られた養成期間の中で、ピアノについてどのような能力を育てたらよいかについて、例えば宮脇（2001）は、保育者に必要とされるピアノについての音楽的能力は、幼児一人一人を見守りながら弾き歌いをし、幼児の音域に合わせて、時には移調ができて、更に身体表現においては、その動きに合わせて即興的に演奏できることである、と述べている。このように、楽曲の演奏技能だけではなく、保育のために必要な弾き歌いや、身体的な表現の援助の際などの即興的な演奏の技能や移調奏などの応用力が必要とされる。

そして、実際の保育の場で子どもを目の前にした実践の中でどのようにピアノを使うかということも大切であると考える。

例えば、子どもが「歌う」ことを例に挙げれば

いろいろな状況が考えられる。田上（2004）は、リラックスしているときに自由に「一人でうたう、少人数の友だちとうたう、そこで共通のイメージをもって仲間とうたう楽しさを知り、もっとたくさんの友だちとうたいたいという気持ちが育っていく。保育者は、『童謡は、ピアノに合わせ、全員でうたう』という形式にとらわれず、まず一人ひとりの中に何が育っているのか、今必要な経験は何であるのかを日々考えていきたいものである」と述べている。このように、子どもの音楽活動の援助において、どのような場面でピアノの技能が生かされるのか、あるいはピアノなしで歌うことだけを楽しむ方がふさわしい状況なのか、といった保育の中でのピアノの使い方やその場に応じた演奏方法などについても養成の場で学生に指導する必要があるといえよう。今川（2004）は、保育者養成において、「音楽に関する知識より、子どもに対する視点を育てることがずっと重要」であることを指摘している。

つまり、養成の場で初心者が入門用の教則本として例えばバイエルにあるような曲が弾けるようになりさえすればよいわけでも、弾ける学生には何も教えなくてもよいわけでもない。学習経験が多いことや、通常のピアノの演奏技能のレベルが高ければ、保育の場で求められる技能についても自ずと高いということはいえず、

\* 東京家政学院大学家政学部

\*\* 理化学研究所・東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科

\*\*\* 埼玉大学教育学部音楽教育講座

それらが一致するとは限らない。例えば弾き歌いについては、学習経験にかかわらず、ほとんどの学生が初めて学ぶといってもよいし、そこには歌う技能についての要素と、伴奏としての技能の要素が入ってくる。加えて、子どもの歌う状況に応じて伴奏を移調したりアレンジする方法も必要となってくるだろう。これらは通常のピアノの演奏技能だけを学ぶことから得られない応用力といえる。また、即興的な演奏の技能を用いて、子どもの身体的な表現の援助や指導方法の中で生かすことは、どの学生も養成機関に入学する以前に触れたことはないといっ

てよいのでないかと推測される。

このように、単なる楽曲の演奏技能だけにとどまらず、これらの技能を用いて、保育の場で実践的にどう使うか、すなわち子どもへの援助や指導方法の中でいかに生かすかということをも含め、保育のために必要な能力と考える。それは、いいかえれば保育者としての音楽的専門性ともいえよう（奥村・山根・志村、2007）。それは幼児自身の音楽的「表現」に目を向け、幼児の表現を基盤とした保育活動を行うために必要な専門性に他ならず、ピアノの学習経験の多少にかかわらず養うことが求められよう（志村・奥村・坂田、2004）。

では、子どもの表現活動のなかでも音楽的側面からとらえられるものはどのようなものか。例えば幼稚園教育要領の領域「表現」のねらい及び内容を見てみると、その中には「歌を歌ったり」、「簡単なリズム楽器を使ったりする」ばかりでなく、「生活のなかで様々な音、……（中略）……に気付いたり、楽しんだりする」、「生活のなかで美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする」、「感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり」する、などが挙げられており、保育者はこれらのさまざまな広がりをもつ表現活動を援助する際、どのような音素材に対しても、敏感な感性をもって子どもに向き合うことが求められると考える。

大場（1996）は、その著書『表現原論 幼児の「あらわし」と領域「表現」』の中で、子どもが触れる楽器の音の質について、耳をつくっていくためにも非常に重要であり、楽器をめぐる音楽的な環境と、それへの子どもの接点とは何かを根本的に考え直す必要性を説いている。保育者が弾くピアノについても同様であり、子どもは日々、保育者の弾く音、音楽を「聴く」のである。それは子どもにとって大切な音であり、また音楽との出会いとなるものである。大畑（1997）が、「子どもと音の出会いを認め、援助する大人や子どもたちとのかかわりあいが、感性と表現を育てる」と述べているように、子どもの感性に働きかけることにもつながり得るものである。このような観点から考えると、例えば弾き歌いの伴奏の楽譜などが技術的に難しく感じる場合、それを無理して弾くよりも、できるだけ自分の技能のなかで余裕をもって音や曲の持つイメージが伝わるような表現ができるように簡単な伴奏を選ぶこと、音を簡略化することなどが選択肢として挙げられるのではないかと考える。杉山（1980）は、保育者に必要なものは、「子どもたちの歌をより楽しいものにしていく感受性と技術」であり、「むずかしい伴奏を止まったり、間違ったりしながら弾くことより、簡単な伴奏でも余裕をもって音楽的に弾くことの方が、当然のことながら、音楽教育上望ましい」と述べている。

以上の問題意識のもとに、本稿では、このようなピアノに関連した専門性が実際の保育の場ではどういう意識のもとに生かされているか、幼稚園教師に質問紙調査を行った。その結果を考察し、保育者養成において育成すべき音楽的専門性をさらに明らかにする。

## II 質問紙調査の概要

### 1 目的

本研究の目的は、幼稚園教師が自らの保育の中で、ピアノに関連する音楽的な知識・技能、

さらには指導方法や演奏方法について何を必要としているか、またピアノを使用する際にどのような困難を感じているかを明らかにすることである。

## 2 対象

対象としたのは、東京都及び埼玉県内の私立及び公立幼稚園に勤務する教師180名である。調査用紙を郵送、あるいは持参により依頼した。返送された回答は155名分であった。この中から回答が不備だったもの、並びに現在クラス担任をしていない者の回答を除き、110名分を分析の対象とした。その内訳は、私立89名、公立21名で、男性6名、女性104名であった。

## 3 実施時期

調査の実施時期は2008年2月～3月であった。

## 4 質問項目

調査は以下に示した3つの質問項目について行った。

- (1) 保育の中で子どもの表現や音楽活動を援助する際に必要と思われることについて、  
1) 保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能に関する12項目、及び、2)  
保育の際に必要と考えられる指導方法に関する12項目について、「必要である」

「やや必要である」「どちらでもない」「あまり必要でない」「必要でない」の5段階で回答してもらった。各々の12項目は、図1及び図2に示した。

- (2) 保育の中でのピアノ等鍵盤楽器の使い方についての質問は、まず、これまでの保育の中で、ピアノの弾き歌いについてどのような点に難しさを感じたことがあるかを、9項目を設けて尋ねた。「ある」「ややある」「どちらでもない」「あまりない」「ない」の5段階で回答してもらった。次に、歌の伴奏をしなければならないとき、伴奏の楽譜が難しく感じられるものだった場合どのようにするかについて、12項目を示し、その中から該当する項目を3つ回答してもらった。また、ピアノのいろいろな弾き方や使い方を、10項目挙げ、その中で「身体的な表現の援助」や「効果音」などとして使うものがあれば、当てはまる項目すべてを回答してもらった。さらに、「思い出のアルバム」(増子とし作詞、本多鉄磨作曲)の歌い出しの一節に異なった伴奏をつけた5つの楽譜を提示して、自分が弾き歌いするときのピアノ伴奏はどれか、1つ回答してもらった。譜例は1から5の通りであるが、調査においては提示順をラ



譜例1 メロディー譜と、コードネームのもの



譜例2 右手がメロディーを提示し、左手担当部分は単音であるもの



譜例 3 右手がメロディーを提示し、左手担当部分は和音となっているもの



譜例 4 右手がメロディーを提示し、左手担当部分は分散和音となっているもの



譜例 5 両手を使う伴奏型で、かつ歌のメロディーが独立して表示されているもの

ンダムにして行った。これらの譜例を選んだ理由として、メロディー譜のみでコードネームを読み取りながら伴奏づけをするパターン、右手メロディー型のパターンの中でも左手担当部分が単音や和音の、音の動きが少なく技術的にやさしい方向を示すパターン、また右手はメロディーではなく両手で伴奏型を弾くパターンなどと、どのような形態を選択するかが、ピアノの専門性を探る大きな要因となると考えたからである。

- (3) 保育の中で子どもの表現や音楽活動を援助する上で、1) 今、一番大切だと考えていること、また2) 問題と思っている

こと、3) 工夫していること、について自由記述として回答欄を設け、記入を依頼した。

### Ⅲ 調査結果と考察

ここでは、保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能、保育の際に必要と考えられる指導方法、保育の中でのピアノ等鍵盤楽器の使い方について、及び現在大切だと考えていること、問題と思っていること、工夫していることなどについての自由記述をまとめ、それらの結果を報告し、以下各々について考察する。

# 1 保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能

まず、保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能についての質問についての結果を図1に示す。この図は項目ごとのデータから、「必要」「やや必要」の回答を合わせて、高かったパーセンテージの順に並べたものである。

図からもわかるように、「必要」と回答されたパーセンテージの高い項目は、「手遊び歌や遊び歌に対する知識」(72.7%)が最も高く、「保育者の弾き歌いの技能」(66.4%)、「保育者自身の歌い方や声の表現技法」(59.1%)、「子どもが歌う歌のレパートリー」(59.1%)の4項目が50%を超える結果を示した。次いで、「子どもの身体的な表現を援助するピアノの演奏技能」(42.7%)、「劇遊び、お話などの際ピアノを効果音として使う技能」(38.2%)、「登

園時など生活の中の歌のレパートリー」(37.3%)「子どもの歌の表現に関する知識」(36.4%)、「子どもの音楽発達に関する知識」(30.0%)、という結果となった。

次に、「必要」と「やや必要」を合わせたパーセンテージが高い項目を見ると、「保育者自身の歌い方や声の表現技法」(98.2%)、「手遊び歌や遊び歌に対する知識」(93.4%)、「保育者の弾き歌いの技能」(93.4%)、「子どもが歌う歌のレパートリー」(90.0%)の4項目が90%以上で最も多かった。次いで「子どもの身体的な表現を援助するピアノの演奏技能」(85.5%)、「子どもの歌の表現に関する知識」(79.1%)、「劇遊び、お話などの際ピアノを効果音として使う技能」(76.4%)、「子どもの音楽発達に関する知識」(76.4%)、「登園時など生活の中の歌のレパートリー」(74.5%)の5

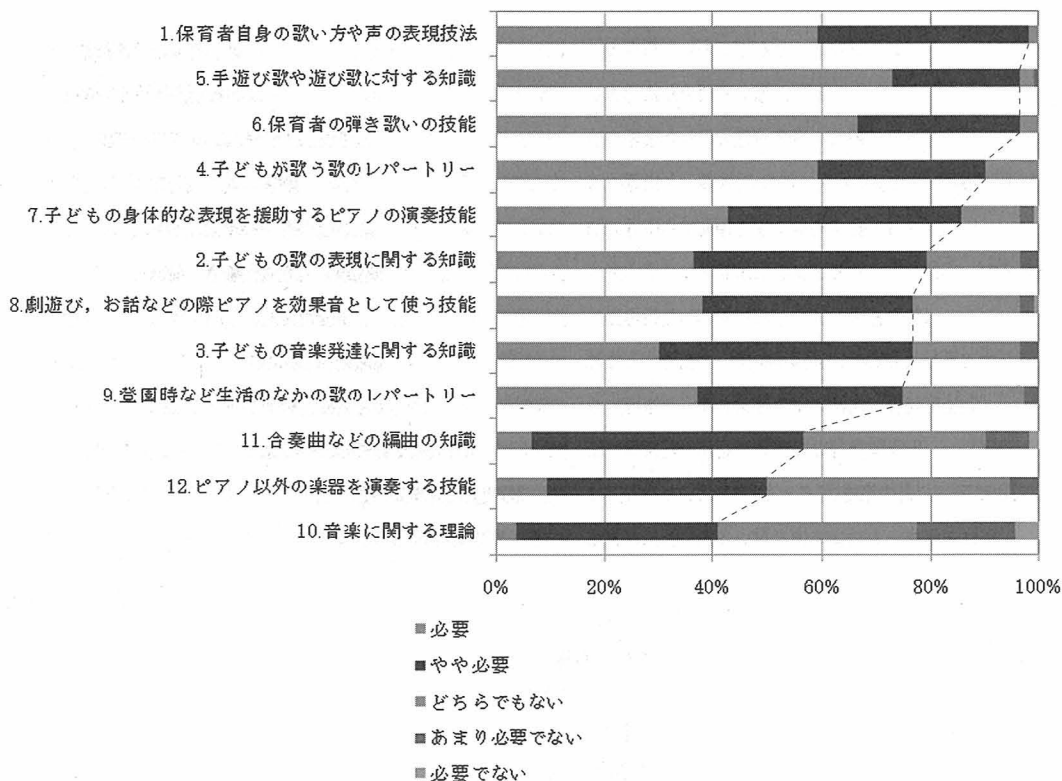


図1 保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能

項目がやや高いパーセンテージを示した。

一方、「必要」と回答されたパーセンテージが低かった項目は、「ピアノ以外の楽器を演奏する技能」(9.1%)、「合奏曲などの編曲の知識」(6.4%)、「音楽に関する理論」(3.6%)の3項目であった。なお、この3項目について、「あまり必要でない」と「必要でない」を合わせた結果は、「音楽に関する理論」(22.7%)、「合奏曲などの編曲の知識」(10.0%)、「ピアノ以外の楽器を演奏する技能」(5.5%)であった。

以上の結果から、ここで挙げた項目の中において、「保育者自身の歌い方や声の表現技法」、「手遊び歌や遊び歌に対する知識」、「子どもが歌う歌のレパートリー」とともに、ピアノに関連した「保育者の弾き歌いの技能」はとりわけ必要とされていることがわかった。またピアノに関連した項目としては弾き歌いとしてだけで

なく、身体的な表現についての援助や、劇やお話などの際にもその援助として使うことが示された。養成の場のこれまでの指導内容が「弾き歌い」に特化することがなかったか、ピアノ指導のあり方が問われる結果であった。どのようなピアノの技能の要素がどのような保育場面で使われるかという視点から、よく検討していくことが養成における課題となろう。

## 2 保育の際に必要と考えられる指導方法

次に、保育の際に必要と考えられる指導方法の質問項目についての結果を図2に示す。この図についても図1と同様に項目ごとのデータを、「必要」「やや必要」を合わせて、高かったパーセンテージの順に並べたものである。

「必要」と回答されたパーセンテージが高かった項目は、「手遊び歌、遊び歌を用いた指導

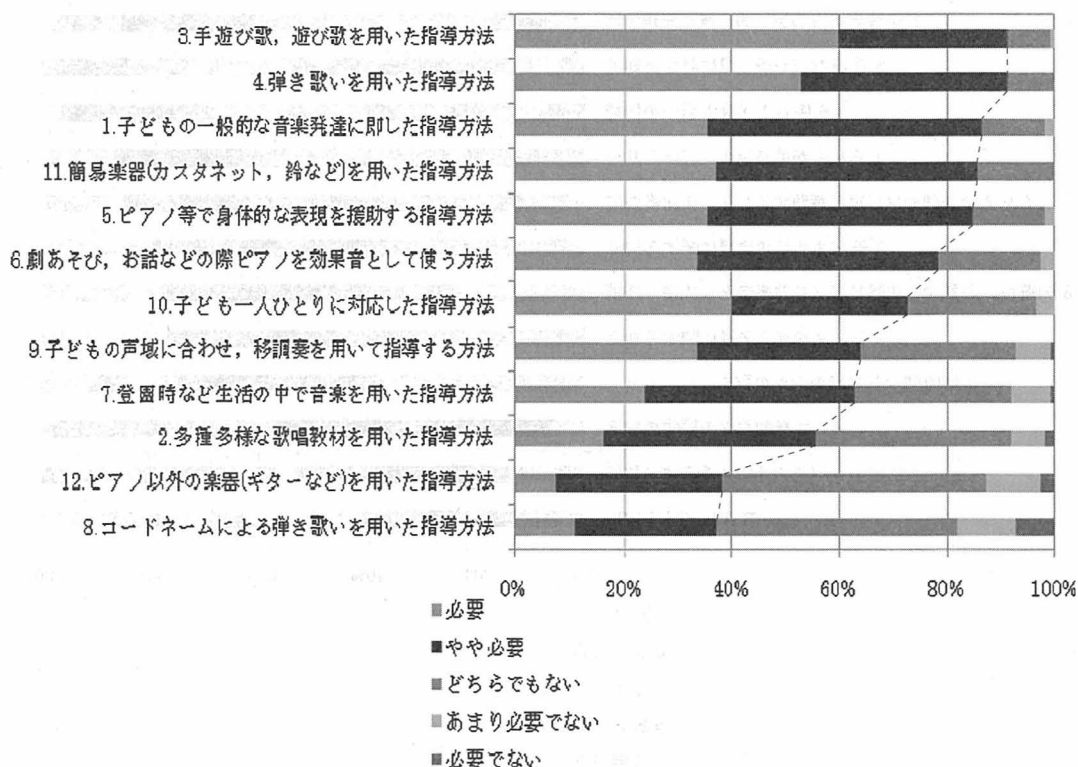


図2 保育の際に必要と考えられる指導方法

方法」(60.0%)、「弾き歌いを用いた指導方法」(52.7%)の2項目であり、次に、「子ども一人ひとりに対応した指導方法」(40.0%)、「簡易楽器(カステネット、鈴など)を用いた指導方法」(37.3%)、「ピアノ等で身体的な表現を援助する指導方法」(35.5%)、「子どもの一般的な音楽発達に即した指導方法」(35.5%)、「劇遊び、お話などの際ピアノを効果音として使う方法」(33.6%)、「子どもの声域に合わせ、移調奏を用いて指導する方法」(33.6%)の6項目が続いた。

また、「必要」と「やや必要」を合わせると、「手遊び歌、遊び歌を用いた指導方法」(90.9%)、「弾き歌いを用いた指導方法」(90.9%)の2項目が最も高かった。次いで「簡易楽器(カステネット、鈴など)を用いた指導方法」(85.5%)、「ピアノ等で身体的な表現を援助する指導方法」(84.5%)、「子どもの一般的な音楽発達に即した指導方法」(83.7%)、「劇遊び、お話などの際ピアノを効果音として使う方法」(78.2%)の4項目となった。

これらのことは、指導や援助の際において、「手遊び歌や遊び歌を用いた指導方法」と合わせて、ピアノによる「弾き歌い」が最も必要とされている可能性を示す。また、「ピアノ等で子どもの身体的な表現を援助する指導方法」、及び「劇遊び、お話などの際ピアノを効果音として使う方法」も、指導や援助の方法として必要と考えられていることが示された。保育のいろいろな場面で、ピアノに関しては、弾き歌いばかりでなく、楽譜を見てそのまま弾くだけではないピアノの即興的な使い方や、移調奏などの応用力を用いて指導方法や援助の中で生かすことが望まれていることがわかった。

### 3 保育の中でのピアノ等鍵盤楽器の使い方について

この項目では、まず、「これまでの保育のなかで、ピアノの弾き歌いについてどのような点に難しさを感じたことがあるか」について、次

に、「歌の伴奏をしなければならないとき、伴奏の楽譜が難しく感じられるものだった場合どのようにするか」について、そして、「ピアノのいろいろな弾き方や使い方」について、最後に「『思い出のアルバム』の歌い出しの一節の5つの譜例から自分が弾き歌いするときのピアノ伴奏はどれか」についての結果と考察を述べる。

#### 1) これまでの保育の中で、ピアノの弾き歌いについてどのような点に難しさを感じたことがあるかについて

この質問項目についての結果を、難しさを感じたことが「ある」と「ややある」を合わせたパーセンテージが多い順に並べ替え、図3に示した。この中で、難しさを感じたことが「ある」という回答が最も多いのは、「弾かなければならない曲が難しい」(37.3%)で、次いで「子どもに指示を出しながら弾けない」(18.2%)、「子どもの歌う様子を見ながら弾けない」(17.3%)であった。

次に、「ある」と「ややある」を合わせた回答の多い項目は、「弾かなければならない曲が難しい」(76.4%)、「子どもの歌う様子を見ながら弾けない」(51.8%)、「子どもに指示を出しながら弾けない」(50.9%)、「伴奏を間違えたときに流れが止まる」(48.2%)という結果であった。

一方、難しさを感じたことが「ない」と回答の多い項目は、「子どもの歌とピアノが合わない」(22.7%)、「実際の音を聞く余裕がない」(22.7%)、「歌うことに集中するとピアノが弾けない」(21.8%)、「弾くことに集中すると歌えない」(19.1%)であった。

次いで難しさを感じたことが「ない」と「あまりない」を合わせた回答では、「子どもの歌とピアノが合わない」(63.6%)、「実際の音を聞く余裕がない」(56.4%)、「歌うことに集中するとピアノが弾けない」(51.8%)、「弾くことに集中すると歌えない」(50.9%)が上位4項目で、続いて「伴奏を間違えたときに流れが



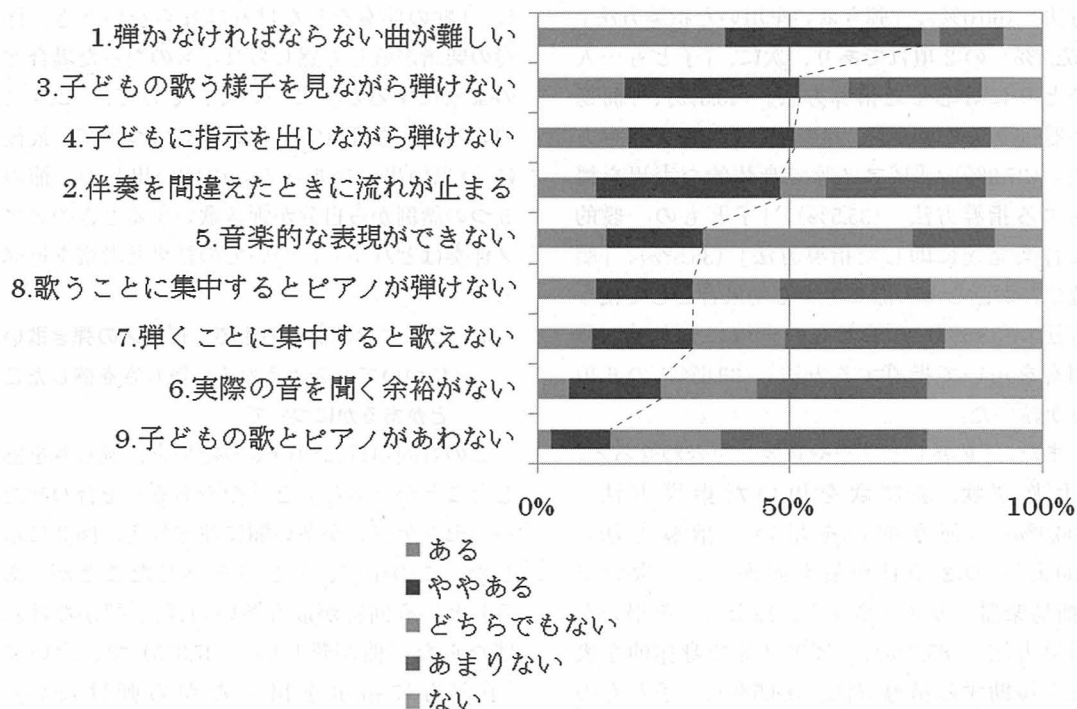


図3 これまでの保育のなかで、ピアノの弾き歌いについてどのような点に難しさを感じたことがあるか

止まる」(42.7%)「子どもの歌う様子を見ながら弾けない」(38.2%)、「子どもに指示を出しながら弾けない」(37.3%)という結果であった。

これらの結果から、調査の対象者の4人のうち3人が「弾き歌いの技能」について何らかの困難を感じているということが示されている。幼稚園での弾き歌いの曲については、例えば小学校における歌唱共通教材のような存在がないだけに、教材選択の多様性があると考えられる。現代の子どもが歌う曲の中には、リズムやハーモニーがより複雑化した曲が含まれているともいえ、そのことも曲の難しさを感じる1つの要因といえるかもしれない。養成の場において、難易度のさまざまな伴奏譜の中から自分が余裕をもって弾ける楽譜、弾きやすい楽譜を選ぶ力、難しいと思う楽譜を簡略化する力という観点からの指導の必要性が示唆される。

また、「子どもの歌う様子を見ながら弾けな

い」、「子どもに指示を出しながら弾けない」、「伴奏を間違えたときに流れが止まる」の3項目については、弾き歌いを用いた指導方法、つまり鍵盤楽器を用いて指導するときの難しさであり、それらに何らかの困難を感じているという回答が、ほぼ50%前後の割合という結果となって示された。一方、この3項目について、難しさを感じるものが「ない」、「あまりない」という回答を合わせると40%前後を示し、回答の二極化がとらえられた。しかし多くの教師が難しさを感じているという現状があることは結果から示されている。

ところで養成機関に在籍する学生の場合、子どもと向き合って保育の中でピアノの技能を生かす機会は、実習などに限られているだろう。それに初心者も含まれる学生へのピアノの指導においては、まずピアノが弾けるようになり、その上で自分自身で歌いながらピアノを弾くことができるようにすること、つまり自分で弾き



歌いすること自体の技能を身につけることが前提となる。弾き歌いができるようにするだけでも精一杯の学生もいるのが現状であろう。しかし実際の保育の場ではその弾き歌いの技能を用いて子どもを目の前にして指導あるいは援助をしていくことになる。例えば楽譜や鍵盤を見ないで子どもの様子を見たり、子どもに指示を出したり、ピアノを弾くことに専念できない状況の中で弾き歌いをするのが求められる。養成の場では学生がより難しい曲を演奏できることを目指すだけではなく、簡単な曲でも楽譜や鍵盤を見ないで弾く体験や、指示を出しながら弾くことをする経験なども授業の中でより実践的に取り上げ指導することが大切と考える。このような保育の中で子どもと向き合って音楽活動をする際のピアノの用い方について、「表現」の領域に関連した授業のカリキュラムの中に系統的に組み入れ、より具体的な実践例を示し、指導していくことが必要といえよう。

## 2) 歌の伴奏をしなければならないとき、伴奏の楽譜が難しく感じられるものだった場合どのようにするかについて

この質問項目についての結果を、パーセンテージが多い順に並べ替え、図4に示した。

伴奏に困難を感じたときの対処法についての質問である。最も回答の多かったのは、「難しいと思う部分を自分なりに簡略化（易しく）して弾く」（82.7%）で、2番目に多い回答は、「同じ曲でより簡単な伴奏で書かれている楽譜を探して弾く」（49.1%）であった。次いで「自分が弾けるレベルの伴奏に自分で編曲する」（38.2%）、「メロディー部分だけを弾く」（34.5%）、「難しくても伴奏だけは練習して弾く」（31.8%）、「コードネームがついている楽譜ならば、書いてある伴奏の代わりにコードネームを読み取りながら伴奏する」（26.4%）の4項目であった。

また回答が10%に満たなかった項目は、「他の楽器で伴奏する」（2.7%）、「伴奏しない」

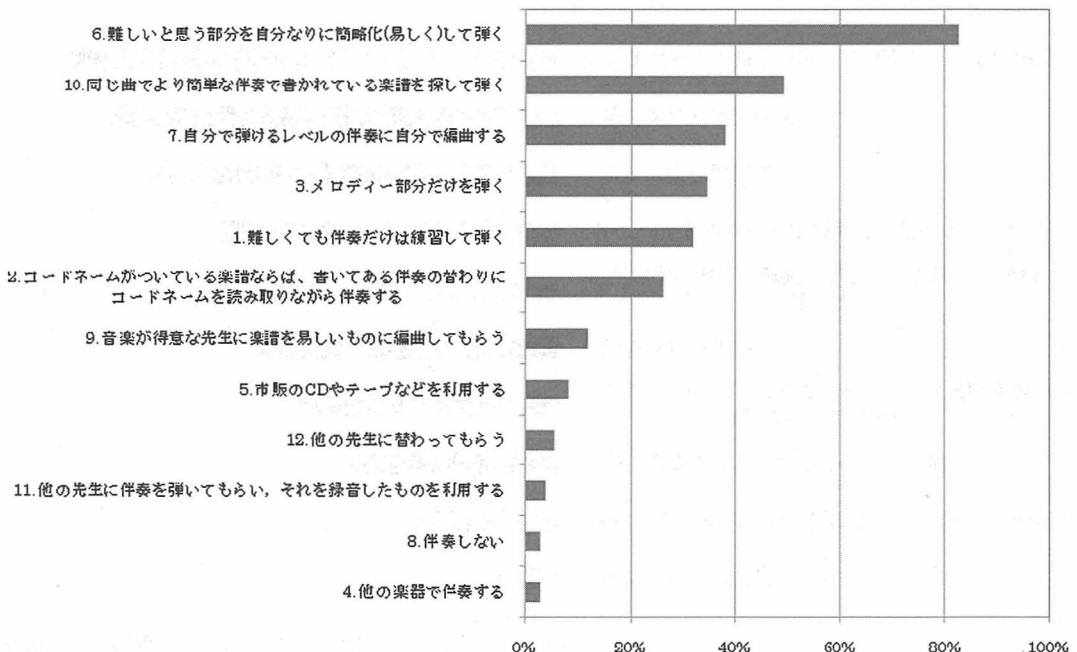


図4 歌の伴奏をしなければならないとき、伴奏の楽譜が難しく感じられるものだった場合どのようにするか

(2.7%)、「他の先生に伴奏を弾いてもらい、それを録音したものを利用する」(3.6%)、「他の先生に替わってもらう」(5.5%)、「市販のCDやテープなどを利用する」(8.2%)の5項目であった。

これらのことから、伴奏を難しく感じたときは、楽譜をそのままの形で使うよりも、自分の力で何らかの方法で簡略化すること、またより簡単な伴奏で書かれている楽譜を探すことなどが主に示された。伴奏の楽譜については、現在、簡易伴奏で書かれている楽譜も数多く出版されており、あるいはネット上などでも検索可能な時代でもある。養成の場で、学生にこうした検索の方法を提示することも、ピアノを指導する上で意味のあることと考える。

一方、ピアノ以外の楽器の使用、市販のCDやテープなどを利用するなど、自分がピアノを弾かないという選択肢は低い割合を示し、楽譜を簡略化することなど回答の上位に挙げられた項目からも示されるように、なるべくなら自身でピアノ伴奏することの中でベストを尽く

そうとしていることが窺われた。

### 3) ピアノのいろいろな弾き方や使い方で、身体表現の援助や効果音などとして使うものがあるかについて

この質問項目は複数回答可である。結果をパーセンテージが多い順に並べ替え、図5に示した。上位3項目は、「速いテンポや遅いテンポなど速さを変えて弾く」(93.6%)、「音の高さを変えて弾く」(86.7%)、「強弱を変えて弾く」(77.3%)であった。これらの弾き方は、身体表現等のとき、即興的なアレンジの方法としてよく使われていると推測される。

次にやや多い項目としては、「トリル」(63.4%)、「グリッサンド」(58.2%)、「右のペダル」(57.3%)であった。また回答が半数以下であった項目は、「アルペジオ」(49.1%)、「伴奏部分の音型やリズムを変えて弾く」(41.8%)、「クラスター」(27.3%)、「左のペダル」(12.7%)であった。身体的な表現等や効果音で「トリル」や「グリッサンド」は即興的な奏法としてやや多く使われていること、また

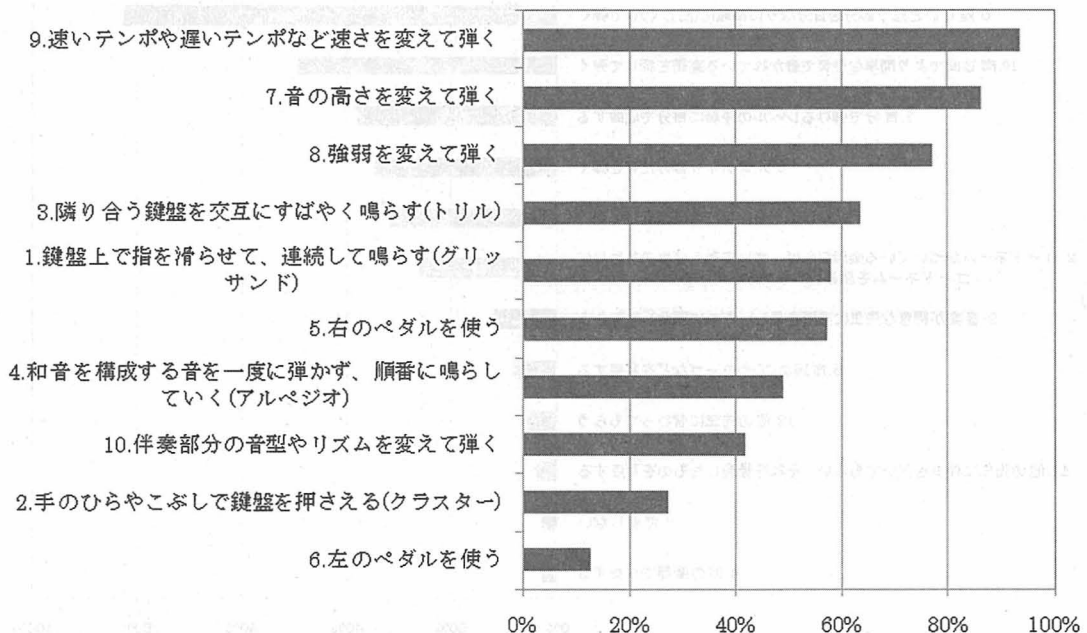


図5 ピアノのいろいろな弾き方や使い方で、身体表現の援助や効果音などとして使うものがあるか(複数回答可)

右のペダルは音響的な効果を出す際にややよく使われていることが窺える。一方、「クラスター」も楽譜にとらわれず弾ける即興的な奏法といえるが、「トリル」や「グリッサンド」と比べて、あまりなじみがないかもしれない。「左のペダル」は保育の中では使っても音響的にはあまり効果がないととらえられていることがわかる。

即興的な表現のためのいろいろなピアノの弾き方については、楽譜通り決められた指の動きで弾くというよりも、弾き手の自由に任せられる要素を含んでいるといえよう。ある幼稚園教師は養成機関の学生時代には初心者としてピアノ学習を始めたが、グリッサンドやトリルなどの即興的な弾き方は指導を受けたことがなく、実習先の先輩の先生からそれを教えてもらったときに少しピアノが自由になった気がしたと筆者に語った<sup>1)</sup>。上谷(1996)は、ピアノの即興的な表現を養成機関の学生に指導することに関して、「楽譜からアプローチという従来通りのピアノ教育のあり方のほかに、楽譜にとらわれず、また保育者のピアノに対する得手不得手にかかわらず、……(中略)……ピアノをプリミティブに捉えることによって、簡単な即興表現が可能なのではないかと考えた。」と述べ、「楽譜がうまく読めなくても指が思うように動かなくても、自分なりのピアノの使い方を見つければ、例えば一本指や数個の音だけで、表現したい気持ちやイメージを音にすることができるのではないかと指摘している。筆者も養成機関のクラス授業の中で、楽譜にとらわれない即興的な表現についての指導を取り入れている。例えば隣り合う音の「ラ」と「ソ」の2音や「ド」と「レ」の2音を使い、音の高さや速さ、強弱を変化させることで、コマが回る様子やダンゴ虫、小鳥、ゾウなど、さまざまなものの動きのイメージなどを表現することができることを実践したり、グリッサンドやクラスターなどの奏法を取り入れたいろいろな効果音としての表現などを学生が学ぶ機会を設けている。たっ

た2音間の音同士の動きの変化でも、またアルペジオでも手のポジション移動のない「ドミソ」と「ドファラ」だけを繰り返して弾くだけでも、いろいろなもののイメージが表現できることから、ピアノに苦手意識を持つ学生にも心理的に抵抗なく習得できる演奏方法といえるのではないかと考える。それは同時に実際の保育の中でのピアノの使い方についても学ぶ機会にもつながるものである。どんな単純な音の動きでも、イメージの盛り込み方によっては、子どもに伝わる表現として意味を持つといえよう。

さらにはどのような弾き方でピアノを鳴らすとどのような響きが生まれるのかという音響的な可能性を体験することは、学生の耳を養うということからも意味のあることといえよう。そのような観点から考えると、左のペダルについてもそれを使うことで音の変化に耳を澄ます体験にもなり得るのではないだろうか。実際にピアノという楽器の音響的な可能性を知っておくことは大切なことである。左のペダルについて使い方を知らない学生には知識としてだけでも、教えておく必要があると考える。保育の場で子どもと表現遊びをするときに、耳をすまして聴くような静かな音が欲しいとき、より弱い音、ソフトな音が表現できたらいいなと思ったときに生かせるのではないだろうか。子どもの鋭敏な耳には、静かな音に聴き入る体験も大切であろうと考える。

#### 4)「思い出のアルバム」の5つの異なる伴奏の譜例から、自分が弾き歌いするときのピアノ伴奏を選ぶ質問項目について

ここでは譜例を提示して、具体的に教師がどのような伴奏を用いているかを明らかにした。表1の結果からわかるように、「譜例4」(97.3%)の回答が最も多く、110名中107名であった。その他、「譜例2」(0.9%)、「譜例3」(0.9%)、「譜例5」がそれぞれ1名の回答があったものの、「譜例1」(0%)は回答した人が一人もいなかった。最も多い回答が得られた「譜例4」は右手メロディー型で、伴奏部分の

表1 「思い出のアルバム」の5つの異なる伴奏の譜例から、自分が弾き歌いするときのピアノ伴奏

|      | 人数 (名) | 割合 (%) |
|------|--------|--------|
| 譜例 1 | 0      | 0      |
| 譜例 2 | 1      | 0.9    |
| 譜例 3 | 1      | 0.9    |
| 譜例 4 | 107    | 97.3   |
| 譜例 5 | 1      | 0.9    |

音型が8分音符による分散和音である。

右手でメロディー部分を提示する伴奏は、子どもたちが歌の音程をとりやすいこと、つまり子どもの歌う音程などを提示するためにピアノが機能的に使われるということが考えられる。また教師自身にとってみるとメロディーラインがピアノで奏されることは自らが歌いやすいためであることが推測される。すなわちメロディーを歌う際ピアノでメロディーを弾いて音程の確認をするのは、子どもだけではなく教師自身も行っているのである。

これに対して「譜例5」の両手伴奏型はピアノ伴奏が歌のメロディーとは別に独立した動きになっている場合、このパターンではピアノでメロディーを提示しないために子どもが歌えない、歌にくいという側面、また教師自身の弾き歌いが技能の面で難しいという側面も考えられる。この両手伴奏型は、普段の保育の中よりも、どちらかというと子どもたちが歌い込んだ発表の場などで使われる伴奏のパターンとしてとらえられてのではないかと推測される。

しかし、保育の中では、歌のメロディーは本来なら教師の歌声によって子どもに提示されるべきものであろう。もし教師の声で子どもの耳に十分伝わる平穏な声量で、音高、リズム、歌詞などが明快なメロディーラインが提示できるとすれば、ピアノでメロディーを弾かなくてもよいかもしれない。ところで、弾き歌いは、ピアノ伴奏とともに何よりも保育者の声で子どもに歌いかけるものである。そして保育者が子

もと歌を歌い合うとき、保育の状況や子どもの発達段階によっては、弾き歌いの曲がピアノを弾かずに子どもと向かい合って歌だけで表現されるような状況もあるだろう。奥村・山根・志村(2007)は、養成に携わる立場から次のように述べている。「教師となり現場で楽しく歌うことができるために、またこちよく聞ける声の育成のために、われわれ養成する者は『声』の指導に責任をもたなくてはならないだろう。……(中略)……保育室や教室で子どもに歌いかける声、子どもとともに歌う声が養成校で指導されなければならない。」そして、「学生自身が自分の声を知ること、自らの声が育てられることを経験して初めて子どもの声への理解や指導が可能になる」として、声の表現を養成の場で指導することの重要性を指摘している。養成において弾き歌いのスキルとして、ピアノが弾けるようになってから歌をつけていくという道筋ばかりではなく、ピアノなしで歌だけで十分に表現できるように学生に指導することが求められているといえよう。

また、右手メロディー型のパターンの中でも左手担当部分が単音や和音の、音の動きが少なく技術的にやさしい方向を示すパターンについては、回答ではごく少数あるいは該当がなかった。「思い出のアルバム」の曲の雰囲気やイメージから、分散和音での伴奏のパターンが選ばれたのではないかと推測される。しかし、保育の場で子どもに指示を出したり、子どもの様子を見るために楽譜や鍵盤から目を離しても止まったりしないで弾けるために、技術的に余裕をもって弾けるようないろいろな伴奏のパターンの選択肢を持つことは、保育者が子どもとともに歌い合うことを楽しむためにも必要である。養成の場でもコードネームの知識や伴奏づけについてより重要な位置づけをすることが求められる。それはあくまでも子どもとともに音楽活動を楽しめるものにすることが目的であるという視点が大切であろう。

#### 4 一番大切だと考えていること、問題と 思っていること、工夫していることについて

##### 1) 一番大切だと考えていることについて

一番大切だと考えていることについての自由記述に回答した対象者の総数は102名であった。「子どもが音楽活動の楽しさを味わうことが大切だ」ということに触れている教師が最も多く、50名であった。また、「子どもが音楽を表現したいという気持ちを高められるような援助をすることが大切だ」としている教師は18名であった。子どもが音楽活動を楽しみ意欲的に行うことをまず大切なこととして考えていることがわかる。なお、102名のうち、ピアノに関連した回答は6名と少なかったが、「一緒に楽しみながら、ピアノが止まることなく弾くこと」といった保育の中で子どもと向き合ったときの自分のピアノの技能の問題や、「学生のときに、なるべくピアノに慣れておく」というような養成の学生のときのピアノの学習経験の大切さについて述べられているものがみられた。

##### 2) 問題と思っていることについて

問題と思っていることについて回答した対象者の総数は78名であった。「声の指導などの方法」について困っているという回答が35名と最も多く、「弾き歌いの技能など教師自身のピアノに関する技能不足」について問題としている回答は26名であった。これらの回答から教師側の指導や技能不足に主に問題点を感じていることがわかった。なお、ピアノに関する技能不足についての具体的な回答としては、「自分のピアノのレベルが低いこと、練習時間が思うようにとれないこと」「伴奏の技術の乏しさ」「自分がピアノを学校の授業でしかやったことがなく初心者であり、うまく弾けないこと」などである。保育の中でピアノを使って子どもに向き合って援助あるいは指導するための前提となる自分自身のピアノの技能についての問題に言及している記述が多くみられた。

##### 3) 工夫していることについて

工夫していることについて回答した対象者の

総数は91名であった。「歌などの援助の方法」について触れている回答が33名と最も多く、次いで、ピアノに関連した「伴奏の工夫について」の回答が14名であった。その中には、「新しい曲のときは、何回か伴奏なしで歌ってみて、子どもが少し歌えるようになってきたところで伴奏つきにしています」というような、子どもが歌を歌えるようになるまでの段階に応じて伴奏のパターンを変えることについて述べているものや、「歌は歌いやすいキーに直し」て子どもの声域に合わせて移調するという回答もあった。単にピアノ伴奏の演奏能力だけではなく、子どもの状況に応じてさまざまな伴奏のパターンを弾けることや移調奏など、実際の指導方法の中でピアノに関連した技能を生かす工夫をしていることが読み取れる結果となった。また、子どもの声域に合わせ、移調奏を用いて指導する方法については、図2に示した「保育者に必要と考えられる指導方法」についての調査結果にもみられるように、6割以上の教師が「必要」、「やや必要」ととらえている。これについてはピアノで調性を変えて弾く技能とともに、子どもの声域についての知識や声の高さを聴く力が求められる。養成の場でも単なる移調奏の技能だけでなく、それを保育の中で具体的にどのように用いられるかということも含めて専門性としてとらえ、学生に指導する必要があると考える。

#### IV まとめ

以上の考察から、対象者の教師たちの傾向として、保育の中で単に弾き歌いだけでなく多様なピアノの技能が必要であること、その技能があつてこそ指導方法が成り立つと感じていることがとらえられた。ここで、「保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能」の12の質問項目と、「保育の際に必要と考えられる指導方法」の12の質問項目について、共通あるいは関連する項目の結果を照らし合わせてみてみよう。ま

ず、「手遊び歌や遊び歌」とともに「弾き歌い」に関しては、「知識・技能」、「指導方法」とともに必要ととらえられている。また、「ピアノ等で子どもの身体的な表現を援助すること」、および「劇遊び、お話などの際ピアノを効果音として使うこと」に関しては、「技能」としても「指導方法」としても、必要なものとしてあげられている。

なお、図1、図2に示されるように、総じて「知識・技能」(図1)の項目の方が、「指導方法」(図2)の項目よりも必要性を高く感じていることが窺われる。保育者として実際の「指導方法」に生かすための、より基礎的な力としての「知識・技能」の必要性を教師たちが感じていると考えられる。つまり、まず個人の持っているスキルというものがあって、指導方法が成り立っているという意識が読み取れる。

また弾き歌いについては、多くの教師が弾く曲が難しいことに困難を感じており、弾く曲の難しさを解決するために伴奏を簡単にする方法についていろいろな選択肢を持つことで解決しようとしていることが窺われた。自分がピアノを弾かないという選択よりもピアノを用いることの中で適切な方法を選択しようとしていた。さらに、ピアノのいろいろな弾き方については、身体的な表現や効果音として多数の教師が経験していることがとらえられた。そしてピアノのメロディー奏が、子どもの歌唱の再生に果たす役割についての研究結果は、大きな示唆を与えるものであろう。

これらのことから、養成においても学生がピアノのいろいろな演奏技能の基礎的な力を身につけること、アレンジできる力をつけることなどについての重要性をより認識することが求められよう。そしてその技能が、保育の中で子どもの表現の援助、指導方法として生かされるものであるという視点に立ち、系統的に学生の専門性を養っていくことが大事であろう。

さらに養成において弾き歌いのスキルとして、ピアノの伴奏部分ばかりの指導に偏ることなく、

歌唱について、ピアノなしでも歌だけでも十分に表現できるように学生を指導することが大切である。いわゆるピアノ中心の発想からの脱却が必要であり、養成の場でピアノによる弾き歌いを指導する者は、歌うこととピアノを弾くことの両方を学生に指導できるスキルを持ち合わせていることが望ましいと考える。あるいはピアノを指導する担当教員と歌唱を指導する担当教員が、共通の弾き歌いの曲について学生に指導するなどの工夫が必要であろう。ここで養成に携わるわれわれにこそ弾き歌いを指導するために必要な専門性が必要であることを強調したい。

なお、弾くのが難しい等の理由で音を簡単にする際、それは決して弾けない人の「仕方がない」選択ではなく、自分の技能の中で余裕をもって弾けることで、子どもの様子を見ながら弾くゆとりが生まれたり、音楽的な要素を意識して表現ができることにつながるものであることを認識することを忘れてはならないだろう。保育者が「どのように弾くか」ということが、子どもが「どのように聴こえるか」につながるわけで、シンプルでも美しい響きや音を奏でようとする意識を求めたい。意味を持たない音や音楽だと思ったときにはすでにそこには音楽的なものは存在しなくなる。自分にとって演奏技術が難しく感じる曲を無理に弾いて音の氾濫に終わってしまうような演奏より、どんなに単純でも、子どもに伝える音、音楽として奏でることが何よりも大切である。保育における音楽的専門性は、そのような意識が根底にあることが望ましいと考える。今後、今回と同様な調査を小学校教師対象にも行い、幼稚園教師との意識の相違、幼小の連携などに焦点を当て、教員養成において実践的指導力につながる音楽的専門性についての検討を行っていききたい(伊藤2008)。



## 謝 辞

最後に、質問紙調査にご協力下さいました幼稚園の先生方に厚く御礼申し上げます。また、質問紙の作成にご協力いただきました教育学部乳幼児教育講座志村洋子教授に深謝します。

## [注]

- 1) 筆者が2008年3月に東京都内の私立幼稚園のある教師から聴き取りを行った際の記録の一部である。

## 文 献

- 宮脇長谷子 (2001) 「保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題—養成校へのアンケート調査を通して—」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』 15-W号 (2001年度) - 1 pp.1-11.
- 今川恭子・阪井恵・奥村正子・小畑千尋・嶋田由美 (2004) 保育者養成座談会「保育者としての専門性のために音楽的な視点から育成すべき力とは」『音楽教育実践ジャーナル』 Vol.1 no.2 pp.38-44.
- 奥村正子・山根直人・志村洋子 (2007) 「教員養成における領域『表現』の音楽側面の検討 (1) —幼稚園及び小学校の教師の意識比較—」『埼玉大学紀要』教育学部 第56号 第1号 pp.69-82.
- 田上美奈子 (2004) 「幼稚園教育要領」の中での領域「表現」のねらい『保育内容「表現」乳幼児の音楽』鈴木みゆき・薮中征代編著 樹村房 pp.42-45.
- 志村洋子・奥村正子・坂田直子 (2004) 「保育者の音楽的『表現』のとらえかた (1) —保育室の音についての意識—」『日本保育学会第57回大会発表論文集』 pp.844-845.
- 大場牧夫 (1996) 『表現原論 幼児の「あrawし」と領域「表現」』萌文書林 pp.114-127.
- 大畑祥子 (1998) 「領域『表現』」『保育内容 音楽表現の探求』大畑祥子編著 相川書房 p.129.
- 杉山知子 (1980) 「幼児歌曲の伴奏に関する一考察 (2)」『美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要』第13号・第25号 pp.21-45.
- 上谷裕子 (1996) 「身体表現のための即興的ピアノ表現—イメージからの音づくり—」『東九州短期大学研究紀要』 7 pp.47-56.
- 伊藤誠 (2008) 「音楽科教師に求められる実践的指導力—教員養成の充実と改善に向けて—」『音楽教育実践ジャーナル』 Vol.5 no.2 pp.51-56.
- (2008年9月29日提出)  
(2008年10月17日受理)



A study of professionalism in music  
for kindergarten teachers :  
Through questionnaires regarding piano performance  
at their instruction

Naoko SAKATA, Naoto YAMANE and Makoto ITO

Keywords : kindergarten teachers, piano performance, kindergarten teacher  
professionalism, teacher education curriculum

In teacher education curriculum, it is generally regarded as essential to be good at playing the piano. This skill also includes utilizing piano performance effectively. In this study, we investigated what is kindergarten teacher professionalism in music, especially piano performance. Kindergarten teachers completed the questionnaire about music performance in the actual practice. The results show that they not only find it essential to play the piano and sing the songs but also to be able to improvise to the physical movement of the children or to change their performance as required. This study indicates that there is necessity to rethink teacher education curriculum and kindergarten teacher professionalism in music.